

本発表では、明治35年に創刊した最古の少女雑誌『少女界』における編集方針を分析し、「少女」という概念が同誌でどのように考えられ、編集方針に反映したのかについて考察を行う。

まず、既存の少女(雑誌)研究においては、この分野の先駆者と位置付けられる本田和子による「ひらひら」という少女イメージの影響から抜け出しきっていないという傾向がみられる。少女(雑誌)研究において、その基本的な性質をふまえずに考察を行うのは片手落ちである。本発表では、少女雑誌の起源としての『少女界』を扱うことによって、従来の「少女(雑誌)」研究において自明とされている概念の真偽を問い、同時に、どのような要素が従来の「少女(雑誌)」像とつながっていくのかを述べることで、既往研究において新知見を追加できる可能性を示す。

さて、「少女」という読者層に初めて対応することになった『少女界』編集部は、未知の「少女」読者が何を好むのか、何を掲載すれば受け入れられるのか、ということについて試行錯誤した。幸田露伴の門人・神谷鶴伴は、2巻4号から廃刊(11巻)までの長きにわたって主筆を務め、「主筆を窓口にして読者と親しく交流する」という編集方針を確立した。それは、「大勢の小供を楽しく遊ばせる」場をつくりたいという神谷の理想と、雑誌に関連する人物に関心をもつ「少女」読者の好みが一一致した結果であった。

具体的には、通信、時報、少女談話会、口絵写真といった誌上企画によってその理想が実現されていった。これらはもちろん、編集部の考えのみではなく読者の反応があって初めて効果が検証され、成立するものである。「少女とは何か」について初めて熟考した編集部と、初めて雑誌にふれる少女読者の関わりの中で、編集方針が確立していく様子を以下で述べていく。通信欄では、誌上交際や編集者との対話など、編集部と読者が親密に交流を行うスペースとしての性格が付与された。特に、「主筆・神谷鶴伴」という存在が認識されていくことによって、通信欄は編集者の中でも「神谷先生」と交流する重要な場となった。

時報欄は、主筆のイメージ形成という機能を通信欄とともに担った。雑誌の代表者として、また、酒と旅行と鼻歌が好きな好人物として、神谷が読者に語りかけることを可能にした。

少女談話会は、地域で読者同士が集まって「談話」を行う会であり、神谷主筆期に誌上で推奨された。同会は、主筆と読者が直に顔を合わせる貴重な機会であり、子どもを大勢集めて「遊戯」という神谷の理想を体現する企画であったといえる。

口絵ページでは、神谷主筆就任以降、読者の写真が欠かさず掲載されるようになった。写真を掲載するには多くの費用がかかったので、口絵の内容が十分に吟味される必要があったことを考えると、神谷主筆が読者を誌上に関わらせることを重視していたことが理解できる

以上、『少女界』における編集方針とその確立について述べたが、その編集方針が、後に創刊した少女雑誌に受け継がれたことも指摘したい。戦後5年ほどまで続く「少女雑誌」の時代において、その最後の時期まで、『少女界』における「少女とは何か」という問いとその解答としての「主筆を窓口にして読者と親しく交流する」という編集方針が、多かれ少なかれ影響していた。

この意味で、『少女界』において得られた編集方針とその背景を分析することは、「少女」という存在の歴史を考える上で重要性をもつ。少女雑誌とは何か、そしてその読者としての「少女」とは何かということを考える際に「主筆を窓口にして読者と親しく交流する」という方針が特徴的な性質として挙げられるとするならば、それが最古の少女雑誌『少女界』において既に熟考され、基礎付けられていたという事実は見逃すべきではない。少女雑誌というジャンルを誕生させ、「少女とは何か」という問題に初めて取り組んだ『少女界』を分析することで、その後の時代とは確実に違う、しかしある部分では、通底音として流れる性質をつくった「少女」のはじまりを観察することができるのである。